

# ある錬金術師の話

U—G

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

国家資格を持つ医療系錬金術師のお話。

人を治し救う為に国家錬金術師となった彼が、イシユヴァール内乱を経てどのような道を歩むのか……。

本編にどう絡むかはノープランです。

# 目次

|              |    |
|--------------|----|
| イシユヴァール内乱    | 1  |
| 雷閃に至るまで      | 5  |
| 転機           | 10 |
| 国家試験         | 15 |
| 走狗           | 21 |
| 人間兵器         | 27 |
| 幕間 発見された手記より | 33 |

## イシユヴァール内乱

どうしてこうなったのだろう。

私の目の前には、先程までこちらに銃口を向けていたイシユヴァール人の少年が横たわっている。

年の頃は十になるかどうかといった程度で、背は私の胸にも届かない。だがその顔は決して、こんな年端も行かない子供のすべき表情ではなかった。涙に濡れ、恐怖と憎悪に染まり、知人や肉親を失った悲しみで歪んだ、二目と見たくない顔だ。結局、撃たれる最期の時まで私に父親を奪われた恨みを叫んでいた。側頭部に一撃、弾は貫通しており動く事はもう無いだろう。

その傍らにはおそらく父親であろう、成人男性のイシユヴァール人が自らの血溜りの中で絶命している。先の戦闘で私が頸動脈を切り裂き殺めた敵兵だ。血液特有の臭いが辺りに満ち、顔を顰<sup>しか</sup>めたくなるのをなんとか堪える。

少年が拾った彼のライフルは既に弾薬が尽きていたのか、あるいは誤作動を起こしたのか。少年が何度引鉄を引いても弾丸が飛び出すことは終に無かった。

弾が出ないと確信していた訳ではない。ただ、それを避けてはならないと思ってしまった。

「いやあ危ないところでしたな！」

背後から声をかけられ振り向いた。全力で走ってきたのだろう、息を整えている皆を待機させたアイザック少尉が立っている。どうやら大きな戦闘にはならなかったようで、少尉をはじめ皆軽度の擦過傷や裂傷は見られるものの人数は変わっていなかった。すぐに指示が飛び、隊列が散開し警戒態勢に移った。

私を救ってくれたのは少尉らしく、彼の持つ銃の先からはまだ灰かに煙が出ている。

「しかし流石は国家錬金術師殿！我々も第一線の兵だとは自負しておりますが、こうも簡単に制圧されると同じ男として些か自信を失ってしまいますな」

依然警戒を怠らない彼が軽口を叩く。

彼が皮肉を言う性格では無いのは、短くはあるがこの地での付き合いで充分に理解している。

だが、それ故にその賞賛が苦しい。

「いえ、私なんて。他の方の様にもっと派手な術が使えれば、皆さんに負担を強いる事も無いのですが……」

「何を仰いますか！自ら先陣を切り敵兵を倒し、戦場を駆け抜け負傷兵を治す！まさに、雷閃の錬金術師ここに在り！」

誇らしげに声を上げる彼から思わず目をそらしてしまう。彼は悪気があって言っているのでは無い。実直で部下や隊の事を第一に考え行動し、他人への賞賛を惜しまない尊敬できる人物だ。事実、隊の内外問わず彼を慕う兵は多いと聞く。そんな彼が私の働きを称える。

そうだ。本来私の役目は負傷した者を治療し癒す事、その為に医学と錬金術を学んだ筈だ。怪我人であれば、病人であれば相手が誰でも治療する。そんな医者、父の尊い背中に憧れてその在り方を志したのではなかったのか。人を治す、その為に国家錬金術師になったのではないか。

それがいざ有事になってみればどうだ。人を救う筈の手で人を殺め、治す為に学んだ知識は効率よく切り刻む為に活用されている。負傷した自軍の兵を治したところで完治させるのが目的ではない。彼等を再び戦場に送り込み、敵を殺す為に治療しているに過ぎない。私は『殺す為に治す』という矛盾した行為を何度も繰り返している。

これは戦争だ、殺し合いなのだ。そう何度も自身に言い聞かせた、いや、言い聞かせたつもりだった。心の何処かで“自分は軍人ではない、兵士ではない”と拒絶していたのだ。

「……ステイル殿、どうされました？」

少尉の呼びかけで思考が止まり我に返る。自分は何をしている、制圧したとはいえ此処は敵陣で戦場の真っ只中だ。こんな体たらくではいつ殺されるか分からない。

軽く頭を振り目の前の現実を意識を集中させる。警戒を終えた隊員達が戻りつつあるのを見るに、思いの外長く思考の内に浸かっている。

たらしい。

「……大丈夫です。何でもありませんよ」

まだ胸中には言い様のない淀みがあるが、それを表に出してはいけない。誇張ではなく私はこの隊の、延いては軍の主戦力その一角なのだ。私の一挙手一投足が士気に影響する以上、不安な表情を彼等に見せる事は出来ない。

大きく息を吸い込みゆっくりと吐く。胸の内を空にするつもりで吐き出したが当然そんな事で晴れるわけも無い。しかし少しは気分の切り替えに役立つたようだ。

辺りを見渡すと、部隊の皆が敵の遺体を迅速に処理し始めている。素早く、それでいて乱れの無い統率された動きだ。もう私がこの場で出来る事は残っていないだろう。私の役目は敵部隊に単身突撃し、自身の身体能力で敵を掻き乱しあわよくば制圧する事。そしてそれが終われば、他の味方部隊の援護及び負傷者の救護だ。そう、それが今の私の役目だ。

もう一度だけ大きく呼吸をし、気持ちを完全に切り替える。ここは戦場だ。殺すか殺されるか、そのどちらかしか無い。そこに個人の感情は存在してはならない。

指示を飛ばす少尉に声をかけ、他の部隊の援護へ行くことを伝える。他の場所ではまだ銃声や爆発が続いているのだ、おそらく負傷者が居るだろう。居なくとも、戦力の足しにはなれるだろう。

「ステイール殿ー」

不意に少尉が私を呼び止める。振り返り見れば真剣な表情の彼が立っていた。何かを伝えたい、だがそれを言葉に出来ない。そんな印象を受ける。

「私は貴方を守るため少年を撃ちましたが、決して後悔の無い選択をしたと信じております……！」

やっと搾り出したのは彼らしくない歯切れの悪い、それでいて彼らしい激励の言葉。どうやら私の顔は私が思ってる以上におしやべりらしい。自分では誤魔化したつもりが表に出ていたようだ。思わず口元が緩みかけるが、気を引き締め彼に向き直る。

やはり彼は尊敬に値する人物だ。

「ありがとうございます。では、行つてきます」

「どうか御武運を……全隊、作業止め!!」

力強い号令が響き皆がこちらへ向け隊列を組む。私も視線を正面から受け止め、姿勢を正す。

「雷閃の錬金術師、ジョージ・ステイル殿に敬礼!!」

一糸乱れぬ美しい敬礼。果たして私はこの敬礼に、彼等に應えることが出来ているのだろうか。

## 雷閃に至るまで

私の錬金術は珍しいとよく言われる。

つい先日も天幕での休憩中に兵士の方に指摘された事だが、私の様に自身の中で術が完結している術師は見た事が無いそうだ。また、どうやら他に参戦している医療系術師は裏方のマルコー医師くらいなものらしい。その会話の際にも説明した事なのだが、元々アメリスの錬金術が科学方面に偏っている所為もあり医療に直接使おうとする術者が少ないのだ——こう説明すると聞いた者は大抵が「勿体無い」と感想を述べる——。これにはもちろん理由があり、この科学重視の錬金術は我が国の成り立ちや歴史に密接に関係している。大きな理由としては歴史的に我が国アメリスは軍主権の国家であり、それに関連する分野が優先で研究されるのは必然だという事だ。特に国家主導の下で行われる研究は無駄を嫌う傾向にある。絶え間無く戦火が燻っていたアメリスにとつて、軍備の補強は文字通り国是と言うべき最優先事項だったのである。それ故にまずは科学分野が大きく発展した、という訳だ。

最近噂に聞く機械鎧オートメイルはその集大成と言っても過言ではない。工業と医療の見事な融合、あれこそ理想の科学の形だ。まだ市場では見る事が少ない新しい義肢だが、悲しいかなこの内乱を経て大きく発展するに違いない。

逆に東方のシンという国では医療に特化しているという錬丹術があり、私の錬金術が珍しいといわれる所以はここにもある。父の遺品を整理していた際、偶然読んだ本が錬丹術に関する内容だったので。科学技術としか認識していなかった物が他国では医療に携わっているという事実に私は大変な衝撃を受けた。幸い父とは違い錬金術の才能が幾許か在った私はその本を頼りに錬丹術を併せて学び、自分が目指す医者の在り方を構築する事が出来た。

しかし個人の力量だけではどうしても限界が訪れる。医者として本格的に働き始めた頃にととうとう行き詰ってしまった。

早い話、誰も錬丹術を知らないのだ。国内では全くの無名と言って

いい他国の毛色すら違う錬金術だ。たった一冊分の内容では程度が知れており、過去に師事していた師匠を初め著名な錬金術師の方々に教えを求めても返事は芳しくなかった。中には私の方から錬丹術の概念を説明しなければならなかった方も居るくらいだ。もちろん自分の研究内容を無闇に晒すまいと知らぬふりをした方も居るかも知れない。だがあれだけ書店や図書館で探して見つからなかったのだ、何処かの陰謀説よろしく裏の世界でのみ息づいている等という事も無いだろう。

ならばと本場であるシンの書物を求めようにも、当時から情勢が悪化していたイシュヴァールを経ての輸入である。私が依頼しようとした商隊は皆首を横に振った。探せば依頼を受けてくれる隊は居たのかもしれない。だが結局は出会わず仕舞いで八方塞、打つ手が無くなったかに思えた。

そんな折、当時担当していた患者の一人が私にある情報をもたらしてくれた。軍の狗と揶揄されて久しい国家錬金術師資格の話だ。彼らを持つ各種特権の内に『特殊文献の閲覧許可』という物があるのだとか。「狗のくせに」と彼は悪態をついていたが、それを聞いた私は言葉を失ってしまった。

診療を終えると早速調べ上げ、それが間違いない情報だと分かった時私に震えが走った。一般には公開されない正に機密の文献だ、市井の図書では足元にも及ばない膨大な知識があるのだろう。その特殊文献とやらを閲覧出来れば錬丹術に関する情報が見つかるかもしれない。たとえ見つからずとも、損になる事など絶対に無いはずだ。私はそこに一縷の望みを託し国家錬金術師になる事を決意した。

その道程は決して容易い物では無かった。確かに私の医療系錬金術は珍しいが、それだけでは価値が無い。その珍しさに更に有用性を持たせ、国を納得させなければ国家資格など夢のまた夢だ。自作の医療用練成陣の構築式を分解し、式の簡略化あるいは結果までの効率化を図り、思いついては実験し失敗を繰り返す。一から研究し直し僅かでも可能性を見出せば徹底的に検証するという、当ても無く終わりの見えない生活が続いた。

やがて幾月か経ち身も心も憔悴しきつた頃に、ある結論に至った。相手は“軍”なのだ、と。

本当は初めから気付いていたのだが、どうしても認めたくなかった。私は医者だ。人を診て治し、癒すのが私の在り様だ。これまで培った知識や技術は全てその為だけに積み上げてきた物だ。

だが、もしもこれを他の為に利用すれば、それこそ軍事に転用すれば絶大な効果を上げられるだろう。なにせ練成陣さえ敷く事が出来れば大抵の怪我は後遺症も無く一瞬で治せる程にまで高めた技術だ。逆に言えば、陣さえあれば相手にどのような影響を与えるかと思いのままという事である。それこそ、陣の構成を分解で留めればあつという間に人は壊れる。人体という物は我々が考えている以上に頑強だが、それ以上に脆いのだ。

私は葛藤した。国家資格を忘れ今までの様に患者を診る安寧な生活に戻るか。それとも培った物を全て使い軍の狗に成り下がり、その先のまだ見ぬ知識に賭けるか。食事が喉を通らず体は痩せ衰え、次第に私は追い詰められていった。

そしてその末に、私は後者を選んでしまった。

考え方を替えてからの研究は皮肉にも予想以上に捗った。私が新たに目を付けたのは、体の筋肉を動かす為の神経に走る電気信号だ。ヒトに限らず動物は脳から発生する電気信号で体を動かすことが解明されている。金属と機械の塊である機械鎧が動くのはこの信号を神経より受信している為だ。

ある説によると、常日頃ヒトの筋力は最大値の30%しか使われていないという。つまり、その信号を操作してやれば人体の秘めた力を強制的に引き出せるのではないかと考えたのだ。制限されている筋力を自由に引き出すのが可能になれば限定的な超人を生み出す事が出来、この軍事国家への大きな貢献と映るだろう。

肝心の電力源は静電気を採用した。あまりにも身近すぎて軽視されがちだが侮ってはいけない。たかが静電気といえど、その最大電圧は1万ボルトにまで達する。普段の生活中、身体への影響が少ないのはこの電圧を通す電流が無いからに過ぎない。膨大な電圧に練成陣

で適度な電流を与え操作出来れば、この技術は確固たる物になる。

問題は増幅した力に、体がどれほど耐えられるのかという点だ。無論電撃自体も危険極まりないのだが、先述の通りこれは自身の筋力に掛かっている抑圧を無理矢理外すというとしてつもなく危険な行為だ。ヒトの体は意味も無く筋力を抑えている訳ではない。もしも最大出力で活動しようものなら筋力に筋肉自身が耐え切れず、瞬く間に筋繊維は全て千切れてしまうだろう。永い進化の過程で種が学んだ身を守る知恵という訳だ。

そこで私は術を使い切れた筋繊維を繋いで治す、即効性の治療用練成陣も並行して組み上げた。こちらは普段治療で使用している陣に僅かな手直しを加えるだけで済んだ。効果はあくまで応急のそれだが、必要なのは発動から治癒完了までの早さだ。掲げた目標である超人、即ち戦場で活動する者を想定するなら確実な完治よりもすぐさま戦闘に復帰できるタフネスが求められる筈だ。少なくともこの軍事国家において軽視されるような物ではないだろう。

本命の電流陣は実験をしながら煮詰めていくしかない。言ってみれば自身を感電させる術だ、下手をすればそのまま死んでしまう危険性がある。事は極めて慎重に運ばなければならぬ。実験用の服に幾つもの練成陣を描き、微弱な電流から始め、流れ方や流す場所を変え、その都度詳細な記録を取っていく。同じ強さの電流でも全く効果が無い箇所もあれば強く反応する箇所もあるのも解った。まだまだ人体には謎が多い。

そして苦渋の決断からおよそ七ヶ月経った日の早朝、度重なる実験の末なんとか使える程度にまで作り上げる事が出来た。試しては構築式を直し、また試しては筋繊維を治す。少なくともこの時点での私の身体は到底健康体と呼べる物ではなかった。極度の疲労から気を抜くと意識を手放してしまいそうになる。頭の中ではもつと早く選べばよかったという後悔と、本当にこれで良かったのかという疑問が渦巻く。決して良いとは言えない体調で何度も吐きかけたが、それ以上に研究の成果が私を奮い立たせた。

まだまだ、まだこの成功を記していない。ここで倒れてしまうのは簡

単で、とても魅力的な選択だ。だがそれは研究者としてあつてはいけない事だ。自身の研究が実ったのであれば、その最後まで記さなければならぬ。それが研究者としての義務なのだ。

今にも倒れそうな体で研究記録を書き終えた私は、そのまま糸が切れたように意識を失った。

## 転機

目が覚めた時、研究記録を書き終えた日から三日も経っていた。

電話も繋がらず、何時になっても出勤しない私を心配して尋ねて来た同僚が、紙だらけの自室で昏倒しているのを発見してくれたらしい。そのまま私は病院職場に搬送され、急いで医者上司が診たところ、極度の疲労と軽度の栄養失調と診断された。『医者上司の不養生』とはよく聞く笑い話ではあるが、実際に当事者になるとこれほど笑えない話も無いだろう。病室で目覚めたまさにその時、腕には点滴で栄養剤が注がれ、口には呼吸器。下半身からはカテーテルが尿瓶へと繋がっていたのだ。状況を把握するのにたつぷり五分は必要だった。そして把握した後には叫びそうになつたが、体力の低下からなのか震えた掠れ声が出ただけで終わった。あと数年で三十路になろうかという成人男性が、悲惨極まりない姿で横たわっていた。

『死ぬほど恥ずかしい思い』とはああいう事を指すに違いない。己の無力さを痛感しながら亡き父と母に精一杯の謝罪をするしかなかった。今思い出しても頭を抱えなくなる。

怒りに満ちた笑顔の上司が状況説明してくれたのは、更に十五分ほど経過してからだった。

「おはようステイール君、実に清々しい朝だ。君もそう思わないかね？」

来室した上司、ザーランド氏が目覚めた私へ最初にかけて言葉だ——その時の時刻は午後三時過ぎ、そして彼の側頭部には青筋が走っていた事を付け加えておく——。

「ああ、楽にしたまえ。現在君の体力は極限まで低下しているのだよ。言いたい事は山の様にあるが、まずは尋ねようじゃないか。……何をしていたのかね？」

何があつたと訊かなかつた辺り、やはり大方の事情は把握していたのだろう。人間、気弱になると見えない物が見えると言うがどうやら本当の事のような。私が説明していた間、彼の背後から黒い炎の様な謎の揺らめきが見えた気がしたが絶対に気のせいだ。そうに決まっ

ている。

喉の調子を確かめる様にゆっくりと自身がこうなってしまった経緯を——国家錬金術師云々は省いて——説明した。その間、彼はじつと黙って耳を傾けていたが、私が話し終えた途端に大きなため息をついた。

「……少しは普段の職場を観察してはどうかね？君は己を取り巻く環境が読めない人間ではないだろう？」

遅すぎた忠告。錬金術治療を止めると、そう言っている。

実の所、錬金術を使用した私の治療法は一部の同僚からは好く思われていなかった。向こう側から見れば、自分達が時には何日もかけて築く“完治”という評判を、私の治療法はほんの一瞬で得てしまうのだ。故に患者は私の方へと診察を要求する、それが彼等は気に入らないのだ。要するに単なる嫉妬、やつかみでしかない。これをくだらない等と思ってしまうのは、私が“持っている”側だからなのだろうか。たとえそうであったとしても私にとって彼等の言葉は“くだらない”の一言に尽きる。使える物は全て使い、患者を治療する。たとえそれがどれほど小さな怪我や病気であったとしても、放って置いても治る物だとしてもだ。患者が頼ってきた以上、医者はその思いに応える義務がある。

「お言葉ですが、私の理想と彼らの理想は違うようなので」「……ふむ。なるほど、なるほど」

ザーランド氏は顎に手をやり何度も頷く。だがそれは私の返答に對してではなく、何か別の物を見て頷いているように感じた。

「ステイール君、君は退院したらそのまま自宅療養だ」

唐突な言葉に思考が止まった。別段長引くような症状でもない、それなのに復帰ではなく自宅療養の診断。これはつまり、暗に自宅で謹慎していると言っているのだ。すぐに“何故”という疑問が湧いて出たが、その疑問が口を飛び出す前に答えが返ってきた。

「君の理想と技術は立派だが、この医院では些か先進的過ぎるのだよ。

……君は皆にとって不和の元凶となりかねんのだ」

反論を許さない強い口調。顔が熱くなり血が上るのを感じた。

なぜ私なのだ、なぜ醜い嫉妬に歪む奴等ではないのだ、私は間違っているのか。

そもそも、この力を認めてくれたのは、貴方ではなかったのか。気持ちの悪い感情が湧き上がってくる。

「無論、君が優秀な医者だというのは私が一番理解している。しかしだね、ここではそう思わない者が多いのだよ。君の周りや、私の周りにもね」

このままでは君は潰されてしまうよ。彼はそう言い残し部屋を出ていった。

一人部屋に残され、私は困惑した。ただ、ほんの少し熱が冷めたおかげで先程の言葉を反芻する余裕が生まれた。今まで好くしてくれた方の言葉だ、裏にどのような思惑があるかは判らないが、少なくとも私の事を案じてくれたのだろうと信じる。それでも入院中は、やり場のない感情が頭の中を廻った。

その数日後無事に退院した私は、「診断」に従い自分の家で時間を過ごす事を決めた。大方、氏よりも更に上の者が下した決定だろう。だが大人しく療養するつもりは毛頭無かった。たかが一病院内のしがらみだ。そんな物に振り回され周りの目に怯えていては、目の前の患者を治すなど到底叶わないではないか。新しい技術を模索して何が悪い。停滞しているだけでは未来など訪れる筈も無いのだ。

ザーランド医師から言い渡された診断は無期限の自宅療養。ならば、その無期限とやらを有効に活用してやろうではないか。

まず手始めに体力不足の改善を目指した。これは研究中也感じていた事だが、今まで机に嚙り付いていただけのデスクワーカーが、いきなり自分の筋肉どうこうしたところで体が追いつく筈も無い。その結果があので入院だ。体力を向上させ、術に耐えられる体に変える。延いては効果を底上げするのにも役立つだろう。いくら筋力を強化すると言っても無い所から持ってくる訳ではない。錬金術の基礎は等価交換、元の力を上げるのに越したことは無い。

昼間は鍛錬、夜は研究という奇妙な療養生活が続いた。今思えばそれまでの私はかなり不健康な生活を送っており、食事は一日に軽く一

食か二食、固形物を口にしない日が続く時もあった。これではいけない。鍛錬をするには当然それらを根本的に見直す必要がある。

知り合いの栄養士に相談し、理想的な食生活を指導してもらう。当時の食事を話すと凄まじい剣幕で怒られてしまい、もちろん食事回数是一日最低三食となった。そして外科医としての知識を総動員し鍛錬を繰り返す。初めは夜毎に訪れる筋肉痛に悩まされ、夜間の研究どころか家事もままならない日々が続いた。しかし一ヶ月経つと研究を再開出来るようになり、三ヶ月が経ち体重が増え始め、半年が経過した頃には私の体は見違えるようになっていた。急造の肉体ではあるが、これならある程度は耐えられるだろう。ちなみに鍛錬は今も継続して行っている。

研究の方も順調だった。安定、安全といった細かい課題点を一つずつ潰していき、入院前と比べるとかなり実用性が見えてきたのだ。走る、跳ぶ、投げる、持ち上げるといった人間の基礎的な運動で目覚しい効果を上げ、またそれらの持続力も大幅に向上する事が出来た。

その後、私はあの医院を辞める事にした。目標へ向けて自分を追い込む為でもあるが、あの場所に価値を見出せなくなったのが何よりの決定打になった。国家資格を取得して凱旋したとしよう。だが市井の錬金術を使うだけで嫉妬されるような場所だ、その敵意は更に顕著な物になるに違いない。それに復帰したとて元の立場にそのまま戻るとは考えにくい。十中八九、閑職に追いやられるだろう。出世に意欲的だったわけではないが、使える権限は多いに越した事はない。

ザーランド氏に退職の意を告げた時、諦めに似た表情をされたのが印象的だった。唯一の心残りを挙げるのであれば、目をかけてくれた恩に何一つ礼が出来なかった事だ。

「そうか……。やはり、去るのかね……」

「はい。今まで有難うございました」

氏の執務室には様々な医学書や解剖図鑑、中には専門以外の本もある。何冊かは私も貸してもらった物もあり大変勉強になったのを覚えている。幾度も訪ねた部屋だが、改めて目に焼き付けるようにしっかりと見据えた。心境が変わるとこんなにも見え方が変わってくる

のだろうか。

「思えば、君には辛い立場を強いてばかりだったな。誠に申し訳ない」  
深々と頭を下げられしまい慌ててそれを制止する。これは私が自分の意思で下した決断だ、頭を下げてもらう事など何一つ無い。こちらでも申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

「今後どうするか、もし悩んだらいつでも来なさい。信頼出来る医院を紹介しよう」

本当に何から何まで世話をかけて下さり有難い事この上ない。可能ならこの人の下で働き続けたかったが、今となつては叶わぬ夢だ。

再度御礼を述べ、もう一度部屋を見渡して退室した。

これで後に引けなくなった。無論後退するつもりなど無い、覚悟してただ只管に前進するのみだ。

私はその足で中央<sup>セントラル</sup>行きの列車へと乗り込んだ。目指すは国軍中央司令部、試験会場だ。

## 国家試験

汽車に揺られて一時間、私は国軍中央司令部の入り口前に立っていた。

随分と長い階段だ。そして階段が長いとはすなわち、建造物が高い位置にあり見上げなければならぬという事だ。往々にして権力者の住居、或いは職場は高い場所に構える場合が多い。初めて見た目の前の司令部そも例外に漏れず、さすがは大総統閣下と顔を上げざるを得なかった。

気が付くと、門番がこちらへ何事かと声をかけようとしているのが確認出来た。慌ててそれを制し、私が此処へ来た目的を述べ返事を待つ。危うく不審人物として尋問されるところだったが、何も突然訪れた訳では無い。事前にしつかりと受験の申請は取り付けていた。

もつとも、申請したからと言って誰もが試験を受けられる訳では無い。軍が推薦とでも言うべきか、少なくとも向こうから声をかけてもらえなければ申請する事さえ叶わないだろう。私の場合は、過去に受け持った患者の何人かが軍人で、評判を聞きつけた上層部が推薦した、らしい。らしいというのは、私はこの時点でその上層部の方にはまだ一度もお会いしていなかったからだ。

まだ本格的な研究に着手する以前の事だ。軍の使者が私の家を訪ね簡単な説明をされた後、受験までの要点が書かれた手紙を渡されたのみだ。一瞬本物かどうか疑いもしたが、この国で軍を騙る者がどうなるかは想像に難くない。なにより、その手紙には大総統府の封蝋がされていた。

### 閑話休題

ともかく、晴れて受験の第一関門を突破出来た私は、こうして司令部前に立っていた。

門番が——通達に向かったのだろう——この場を離れて少し時間が経過していた。どれ程離れているのかは知らないが、この類の待ち時間はいつも永く感じられる。まさか律儀に直接部屋まで走って行ったわけは無いだろう。そんな事をせずとも、今は電話という文明

の利器がある。

いや待てよ、もしかして受験の旨が下位の兵士まで伝わっていないのだらうか。となると、私は怪しい奴としてこの場で取り押えられるかもしれない。そうなつては拙ますい、第一印象が最悪ではないか。その場合どうすべきか、大人しく捕まるか、それとも術を使い逃げるか。いやいや逃げてどうする、それでは不審人物その物ではないか。かと言って捕まるのもいただけない。——等と根拠の無い不安に駆られる。

だが、そんな考えは間もなく霧散した。

「お待たせしました。案内致します」

緊張が解け、安堵の息を吐いた。意味もなく自分一人で緊迫してしまった。こネガティブなういう思考は私の悪い癖だ、改めなければならぬ。

さて、この先に待ち構えるは国家試験。試験項目は事前に通達されてはいたが、たとえ何が来たとしても相手にとって不足無し、いや、不足どころではない相手だ。襟を正し、背筋を伸ばし、前を往く兵の後ろを案内されるままに付いていく。

通されたのは少し広めの個室、その中央に机と椅子が用意されていた。此処が筆記試験の部屋らしい。試験官に促され着席し、説明を受ける。ふと、かつての学び舎を思い出し、年甲斐も無く学生気分になつてしまった。これではいけない。気を引き締め、開始の合図と同時に机上の問題用紙へ挑み掛かる。

結論から言つてしまえば筆記問題の空欄は難なく埋められた。もちろん、難しい分野や事例を織り交ぜた国家試験に相応しい内容ではあつたが、この日まで培つてきた知識を総動員すれば躓つまづく部分はまるで無い。全ての空欄を埋め、解答を見直しても時間が余つてしまった。

これはもしかして楽勝なのではないだろうか。

危険な驕りが顔を覗かせるが慌てて振り払う。慢心は破滅のもつてでしかない。

規定時間よりも早めに答案用紙を提出し、すぐに次の部屋へ移動となつた。

ここまで問題は無い。体調も良好、集中力も理想的な形で発揮されている。この状態を維持しなければならない。

次の試験は精神鑑定だ。——なのだが、その感想については敢えて特筆すべき事が無い。

精神鑑定の方法は精神科の親しかった同僚から教わった事があり、この試験でも凡そ同じ手法おおよが採用されていた。無論、だからと言って有利になる様に答えた訳ではない。それはそれ、これはこれ。国家資格を得て、国に仕えようと志す者がそんな卑怯な手を使つていい筈が無い。

真面目に、真剣に、ジョージ・スティールという自分を飾らずに答えていく。後で行った自身おこなの鑑定では『勤勉な性格で社交性もあるが、過度な協調を苦手とし内に籠もりがち』という結果が出た。実的に射ているではないか。

さて、小休止を挿み次はいよいよ本命の試験、実技試験の時間だ。今までの試験は形式的な、知識と常識さえあれば通過可能な項目ではない。

だがこの実技は違う。この試験で、自身が国家に仕えるに値する人材だという事を証明しなくてはならない。どれ程の知識があるうとも凡庸な人間では意味が無い。もちろん逆もまた然りだ。

最後の部屋へと案内され廊下を歩く。徐々に心音が高鳴り、気分が高揚していく。決して悪い気分ではなく、心地よい緊張という表現がぴったりだった。

ついに扉が開かれ、最後の試験会場へと通される。

随分広い部屋だったのを覚えている。正面の壁には大總統紋章が描かれ、部屋の両脇には警戒の為の兵士が、そして吹き抜けになっている二階部分には、軍のお偉方らしき方々がこちらを覗き込んでいた。皆、興味津々といった様子でこちらを観察している。未だ数少ない国家錬金術師、その一人にならんと門を叩いてきた人間だ。私も逆の立場だったなら、是非とも見学したい。

試験官の説明も終わり、実技開始となった。練成陣を描く道具の有無を確認されたが、私には必要無い。私の四肢にはすでに刺青で陣が

描かれているのだ。

かつて刺青を剥がす手術オペをした事があるが、まさか自分に刺青を入れる事になる等その時は思いもなかった。実際私の術はわざわざ刺青で描かなくとも、効果こそ落ちるが陣を写しただけで着用すれば事足りる。しかし、それでは軍に技術提供をしただけで終わってしまう。私でなければ使えないと、”研究の余地あり”と思わせなければいけない。術を使用する為には、刺青を施さなくてはならない、そう思わせるのだ。

なによりこの術は国家資格を取るためだけに作り上げた物で、錬丹術研究への足掛かりに過ぎない。あくまでデモンストレーションであり、実際に使用されては困るのだ。もし全軍で使用されれば、今後展開される戦線は更に酷い物と化すに違いない。

私の本分は”治す”事だ。そこを見失ってはいけない。

「では、始めてください」

正面に立っている試験官が開始を促し、周りの様々な視線が私に集中した。真剣な眼、興味本位の眼。注目される妙な気恥ずかしさから、私はその視線を避ける様に部屋を見回す。この部屋でも披露出来ない訳では無いが、少しだけ色気を出してみる事にした。

「すみませんが、屋外へ移れないでしょうか。ここは少し狭いので。……あと自動車と運転する方もお願い致します」

先も言ったが、この部屋は充分に広いと言えるだけの空間がある。数十人は余裕で納まるに違いない。だがせっかくの晴れ舞台だ、どうせなら派手に披露させてもらおう。

屋外にある演習場、そこに私は案内された。流星にかなりの広さがある。各所では兵たちが、それぞれ鍛錬に励んでいるのが見て取れた。

私の隣には、移動の際に頼んでいた自動車が並んで停まっていた。もちろん運転手付きだ。そして私達の正面、その100メートルm先には審判役の兵士が立っている。

これから私が披露するのは、術を使用しての車との競走だ。この提案をした時の試験官達の顔は今でも覚えている。まるで、聞いた事が

無い外国語を初めて聞いたかの様な、意味不明な何かを聞いたかの様な、なんとも言いがたい不思議な顔だった。

だが私は本気だ。私は自分が編み出した術を使い、本気でこの自動車に勝つつもりで提案したのだ。理論上は——あくまでも理論上は——術による強化と治癒を繰り返せば勝てる筈だ。

たとえ競走に勝てなくとも、車と並走出来るだけの力がある事を示せば、試験としては私の勝ちと言えるだろう。

まだ半信半疑の表情を浮かべた兵士が傍らに立つ。彼の手が振り下ろされれば、それが開始の合図となるのだ。

私が作り上げた理論は実用できる術となった。己の力に耐えられる様に自身の体も鍛えた。傷付いた身体はすぐに治せる様に再生の陣を施した。

懸念すべき事は何も残ってはいない。前を見据え、四肢に描いた陣を発動させる。練成反応とは別に放電現象が起こり、同時に体の筋繊維が脈動し始める。

出し惜しみはしない。今持てる力を最大限発揮させよう。

兵士の右腕が大きく振り下ろされる。

その瞬間、地面が大きく抉れ、私は終点<sup>ゴール</sup>を駆け抜けていた。

「——大總統キング・ブラッドレイの名において、汝ジョージ・ステイルに 銘“雷閃”を授ける。……おめでとう、ステイル君！」

後日、試験合格の通知を受けた私は、中央司令部の一室で拝命証と銀時計を授与されていた。大總統に代わり授与して下さったのはレイブンス少将、私の推薦責任者でもあった方だ。

「いやはや聞いたよ。なんでも自動車と競走して勝ったんだって？そしてこの銘、また実に洒落た二つ名じゃないか！」

「ありがとうございます。“雷閃”の銘、謹んでお受け致します」

「うんうん、君を推薦した者として私も鼻が高いよ」

がはは、と豪快に笑うレイブンス少将。会うのはこの日が初めてだったが、まるで昔馴染みの友人であるかの様に親しげに話しかけてく

る。お偉方という人種は堅いものだとはかり思っていたが、こういう方と会うと考えを改めざるを得ない。

「さて、国家鍊金術師の資格を得るにあたっての制限は先程述べた通りだ。また、軍属になる以上、軍及び国家へは揺ぎ無い忠誠を誓うこと。もしも上がこれらに反していると判断したら、資格はあつという間に剥奪されてしまうよ。解ったかね？」

だが時折見せる鋭い眼光と迫力は、やはりこの方が生粋の軍人であるという事を意識させられる。自然と私の背すじが伸びた。

「よろしいー……いやあ、まさか国家鍊金術師誕生の瞬間に立ち会えるとは。なかなか貴重な経験をさせてもらったよ、ありがとう！」

將軍と固い握手をかわし、こちらも改めて礼を述べ司令部を後にした。

帰りの汽車の中、抑えても抑えても口角が吊り上がる。込み上げる喜びを噛み締めながら賜った銀時計を撫でた。

何度も蓋を開閉してしまう。意味の無い無駄な行動、それでも無性に触りたくなる。まるで、新しい玩具を与えられた子供の様だ。こうして手の中に在っても、夢ではないかと考えてしまう。だがこの感触が、紛れもなく現実なのだと教えてくれた。これからは国家鍊金術師として、存分に鍊丹術の研究が出来るのだ。

そう、出来るはずだったのだ。

資格を得てから七十六日後、あの『大總統令三〇六六号』が発令。

私は人間兵器として、イシユヴァール殲滅戦に参戦する事となった。

## 走狗

少尉達と別れた後、私は単身戦場を駆けていた。言うまでも無く負傷した兵を探す為だ。遠くに響く砲撃の音を聞きながら、他の隊が居るであろう次の作戦区域を目指して走る。だが単独行動をとってまだ十数分と経たない間に、私の心身はその疲労の色を濃くしていた。

目を凝らし、耳を澄まし、負傷した国軍兵を探し、そして我が身の安全を確保し。およそ兵としての訓練を經ていない私にとって、それは精神をえぐり取る様な環境だった。

どれ程走つたのだろうか。心臓は早鐘を打ち、体温は限界まで上昇していた。この地に就いて初めて判つた事だが、私の術は長時間の連続使用には向いていないらしい。その原因は生物の活動に密接に係る生理現象、“発熱”だった。人に限らず動物の運動には——大小の差はあれど——発熱を伴うが、術を使用した運動で発生するこの膨大な熱量が、どうにも解決出来なかつた。通常、熱を発散する為には当然何らかの形で冷却しなければならないのだが、強制的に体を動かす事で発生する熱量は発汗程度では到底抑えられるはずも無く、この様に悪質な熱病一步手前まで体温が上昇するのだ。そして体温が上昇すれば生理現象である発汗が促され、一頻<sup>ひとしき</sup>り走つた後にはまるで湯を被つたかの様に濡れてしまつていた。これでは衛生面だけでなく、静電気を利用する私の術にも大きく影響してしまふ。

倒壊し僅かに残つた家屋の壁に背を預け座りながら、携帯している水筒の片方を開け中の水を呷る。決して冷たいとは言いが、それでもこの場では何物にも勝る甘露となる。口腔に溜めた水をゆつくりと飲み込みながら水筒を覗き込む。残りの水は半分を切つていた。大切に扱わなければ。

もう片方の水筒も開け中身を僅かに首筋へかける。こちらは消毒液のアルコールだ。気化熱を利用し、血管を冷やす。この妙な清涼感が実に心地いい。本来はこちらの方こそを温存しなくてはならないのだが、この苛烈な場所では平熱まで待つ時間すら惜しい。

汗を拭い、呼吸を整えながら辺りを警戒する。戦場の中心から比較的外れた位置にあるとは言え、微塵も気を抜く事が出来ない。いかに外れた場所だろうと戦場には違いない。私は警戒は怠らず、地面に汗を分解する為の練成陣を描く。汗を分解とは言っても水やナトリウム、カリウムや皮脂等の主成分のみで、完全に分解する訳では無い。あくまで急造の応急処置の陣だ。その上に濡れた軍服を広げ手をかざす。僅かに練成反応が生じ、軍服に滲み込んだ汗を排出する。慣れたとは言え、この一連の動作は酷い無駄だ。原因となる発熱を解消できない以上仕方無い事だが、せめて幾分か時間の短縮は図れないだろうか。この練成陣を描いた紙や布を携帯するか、あるいは服に直接陣を描くのも良いかもしれない。次回の作戦までに試してみるとしよう。

ふと気が付くと、右手が左胸に添えられていた。どうやら無意識に胸元の銀時計を触っていたらしい。この地に来て、いや、戦場に来てからどうにも銀時計を触る事が多くなった。蓋を開け時間を確認する訳でも無く、手にとつて眺める訳でも無い。単に手で触れている、ただそれだけ。だが、こうすると落ち着きと安心感を得られるのだ。

この異常とも言える地で、私を私たらしめる唯一の物が、大総統閣下より賜ったこの銀時計だ。これがある限り私は“私”を確立出来る。銀時計を持つが故に“ジョージ・ステイル”は存在するのだ。乱れていた呼吸、心音が整っていく。

汗も引き、体温も安定してきた。

随分と怠けてしまった。早く仕事に戻らなくては。

上着を羽織り腰を上げ、いざ駆け出そうとしたその時、微かな叫び声が届いた。叫び声自体は戦場では何ら珍しい物では無い。敵味方問わず毎日誰かが死ぬこの地で、断末魔程度では話題にもならない。

それでも私が足を止めたのは――

「衛生兵ー!!」

――“私”を必要としている声だったからだ。この二度目の呼び声で凡その方向は確認出来た。両脚に力を籠めて一気に加速する。

地を駆け、壁を蹴り、塀を飛び越え。回り道している暇は無い。戦場での怪我は死に直結する物が大半であり、兵の損失は隊の損失に、延いては軍の、わが国の敗北に繋がるのだ。それを防ぐ為の第一歩として“私”を待っている現場へ、苦しみに喘ぐ負傷兵へと急ぐのだ。私を求める者がいる、その事実には確かな高揚を感じてしまう。粘りつく様な、たやすく濯ぐ事は出来ない興奮。この極限の環境下で初めて味わった仄暗い快感。声の許へ急ぎながら、私は耐え難い喜びを確かに感じていた。

現場へは走り出してから数分もしない内に到着した。

壁を背にしている兵が五人。どうやらまだ戦闘中らしく、各々が銃を手にして散発的に壁の向こうへ牽制射撃を行っている。そしてその傍らには仰向けに倒れている兵が一人。

「衛生兵到着しました。状況を！」

「来てくれたか、ありが……ッ!? し、失礼しました！少佐殿！」

肩の階級章を見たのだろう、目の前の中尉が言葉遣いを改め敬礼をした。

平時より少佐相当官の地位を持つ国家錬金術師だ。それはこの環境でも例外ではなく、私も配属された際に一個小隊を任される事となった。だが軍隊経験などまるで無い私が、いきなり現場で采配を揮えるワケが無い。故に私の隊は、直下の部下であるアイザック少尉に全指揮を任せ、隊の名も彼の名義で統一してもらっている。

下手に素人が触れるべきでは無い。

「それよりも負傷した者の容態を。敵の足止めも続けたままで！」

「は、はいッ!!」

患部は

——左脇腹の上部に銃創一カ所

弾は抜けたか

——貫通はしていない

経過時間は

——三分と経っていない

意識は

——しつかりとしている

吐血は

——まだ無い

見た限りでは、外腹斜筋と前鋸筋の間を破る位置に被弾している。貫通していないという事は筋肉を抜け肋骨で止まったのか、或いは内臓で弾道が変わり止まったのか。前者はともかく後者であれば非常に不味い。この位置の場合、被弾するであろう内臓とは肺だ。もし肺に被弾していたならば、溢れ出る彼自身の血液で肺胞が満たされそのまま溺れてしまう。そうなると筆舌に尽くし難い苦しみの中で死ぬ事になる。しかし、診た所まだ呼吸は比較的安定しており、水音を伴う咳も無い。経過時間が短く判断が難しいが、少なくとも肺にそこまでの大きな損傷は無いようだ。

かと言って前者であったとしても絶対安静の重傷である事に違いは無い。仮に骨で止まっていたとしても、その骨が折れていたなら無事だった内臓を傷つけてしまう恐れもある。

何にせよ、まずは弾丸を摘出してからだ。このまま傷口を治す事は出来るが、弾丸を長時間体内に残していると鉛中毒の原因となる。しかし悠長に手術オペをしている暇は無い。今も傍らでは銃弾が飛び交っているのだ。

「彼の四肢を押さえてください。……少々荒くなるので」

故に最低限の工程で施術する事にした。

横たわる彼の胸を僅かに持ち上げ、その隙間に携帯している治療用スコーロールの練成陣を挿し込む。蛋白質やカルシウム等の人体の主成分を使い傷口を塞ぐ、緊急性のみを重視した術式だ。肉体への負担が大きく、普段の治療であればまず使う事は無いだろう。そのまま彼の服を切り患部を露にすると、小指より一回り程小さい穴が現れた。銃の口径は大きな物では無かったのか、出血もそこまで派手な物では無い。

続いて手術用手袋を着用し手と患者の傷口周辺を消毒する。そのまま患部付近へ、モルヒネ注射を施す。

さらに持参した手術道具から、もう1つ練成陣を取り出した。

1秒すら惜しいこの場では、彼の体を切り開き、行方不明となった

弾丸を探す時間など無い。

ここは彼自身の体で弾丸を追い出してもらおう。

「聞こえますか？今から貴方を治します！いいですか？私が絶対に、貴方を治します！ですから、貴方も頑張ってください！」

気休め程度の声かけ。だが生死に関わる状況では、この“気休め程度”が時に結果を左右する。

「了解です……！お願いします、少佐……！」

堪らず心が高揚してしまう。喜び、感動、焦燥。様々な思いが渦巻く。私は今、この場で、人々に、必要とされているのだ。

この瞬間こそが、私の生涯の彩りとなるのだ。

そして、“必要”に応えてこそ、その彩りはより完璧な色へと近づく。

目の前の彼は確かに弱ってはいる、しかし心は折れていない。これなら耐えてくれるだろう。

返事にうなずき、手にしたスクロールを患部へと押し当てる。練成反応が起こり、効果はすぐに現れた。

絶叫。

彼の体が大きく跳ね、痙攣する。耳を塞ぎたくなる程の悲鳴が、彼の口から飛び出し続ける。

今押し当てた練成陣は、内臓を“作る”式が描かれている。患者自身の内臓を材料にして、損傷した内臓を“作り直している”のだ。

近年の医療では内臓を移植する実験が行われているが、まだ実用的とは言えないのが現状だ。どうにも他人の臓器を移植するには相性が大事、との事らしい。

ならばと私が試したのが、この術である。患者の内臓を使い、患者自身の内臓を作る。無駄が無く、そして無理の少ない手術だ。内臓が飛び出していたり大きく欠けていたのなら使用は出来ないが、今回必要な物は全て患者の体内に揃っている。

「しよ、少佐殿！本当に大丈夫なのですか!？」

彼の腕を押さえている中尉が、あまりの反応に心配したのか不安げに問いかけてくる。

「問題ありません！……彼を押さえ続けて！」

確かに不安にもなるだろう。治療らしき物を施された部下が目の前で、断末魔を上げながらのた打ち回っているのだから。

だがその事を気にかけている暇は無い。冷静に、患者の健康な内臓をイメージし、施術に努めなくてはならない。

肺、胃、及びその周辺を“奥”から作り直し、外へと進める。残っている異物を押し出すように、新品の体へと作り直していく。

「……弾丸、摘出しました！」

患部付近の中身をすっかり直し終えた時、銃創から血の塊と共に、変形した弾丸が吐き出された。

すかさず始めに敷いた練成陣を発動させ、体に開いた穴を治療する。

流星に気を失ってしまった様だが、その呼吸は徐々に落ち着きを取り戻している。

患者には無理を強いてしまったが、少なくともこの怪我で死ぬ事は無くなった。

「……終わりました。患者を連れて後方へ下がってください。何人かは私の後へ続いてください」

ここまでは、人々に必要とされる医者私の勤め。

そしてここからは、国に必要とされる人間兵器私の勤めだ。

## 人間兵器

このイシユヴァール殲滅戦に参加するに当たって、いくつか支給された物がある。

まずはこの軍服。軍直属ではない私の為にわざわざあつらえて頂いた、上質のウールを使った一張羅だ。流星は軍事国家アメストリスの軍服、その着心地は生半可な服よりも素晴らしい。加えてその意匠も実に凝っている。私は服飾については全くの素人だが、これほど凝った外見でありながら機能が損なわれていないのは賞賛すべきだろう。東の方の村がこの羊毛の産地だと教えてもらったが、残念ながらその名前は失念してしまった。

次に拳銃などの武器類だ。とは言え碌な訓練すらしていない素人が拳銃を握ったところで、まともに当てられるわけが無い。構えればふらつき、ひとたび撃てば弾は明後日の方へ消えていく。ここに来た当初も何度か練習をさせてもらったが、結論として私の射撃は「弾の無駄」だと証明されてしまった。作戦行動中も拳銃は携帯こそしているがおよそ使える気がしない。「最後の弾丸は自決用」という言葉があるが、到底私には不可能だ。叶うならその機会が無い事を祈る。

そして最後に、本人が用意する装備を携行する権限である。要は術者本人が効率よく術を行使する為の物だ。鉄血の銘を持つグラン大佐は、陣が刻まれたガントレットを。焔の彼は同じく、陣を描いた手袋を持ち込んでいる。

私を持ち込んだ物は先程の治療に使ったような、何種類もの医療用練成陣をそれぞれ印刷した紙の束。切創から骨折まで幅広く治療可能な、私にとって生命線とも言うべき装備だ。

それともうひとつ用意した物が、この大型の軍用ナイフ二振りである。

私が出来る戦術は自身を強化しその力で敵を打ち払うだけだ。他の錬金術師たちの様に武器を練成したり、あるいは地形ごと吹き飛ばしたりなどは——元よりそのつもりも無いので当然と言えば当然なのだが——出来ない。かと言って丸腰で立ち向かうのは愚の骨頂だ。

銃は使えない。あるのは人体の知識と、無理に仕立てたこの怪力だけだ。となれば自ずと出来る事が限られてくる。

つまり、ただ力に任せた突撃である。

「壁向こうの敵へ奇襲をかけます。皆さんは場の混乱に合わせ援護を頼みます」

治療が済みいざ反撃に移ろうと構える面々に伝える。敵がいるのは教会のような物だったのであろう、屋根が崩落し壁だけが残った大きな建築物の中だ。困いの中に追い詰めたとさえ聞こえはいいが、その実は堅牢な扉の中から待ち伏せされているに過ぎない。建物と外を隔てるこの大扉付近で熾烈な攻防が繰り広げられていた。

「ですが少佐殿！敵の反撃は依然強固なままで他に入り口もありません！無理な突入はせずに、このまま救援を待った方が……」

盾代わりになっていた大扉はもはや使い物にならないほどに損傷してしまった。そして入り口からは絶え間なく銃弾が吐き出されている。中の敵は元々ここで籠城する事を想定していたのだろうか、よほど溜め込んだ弾薬があると見える。救援を待つのも一つの手だが、それは相手方にも言える。蓄えがある分、敵の方が優勢だ。

そして仮にこちらの援軍が来たとしても攻め込む場所はこの正面入り口からしか無い。四方の壁は高く、窓という窓は頑丈に封じられている。壁を越えようとしたとて登りきったところで撃ち落とされるのが目に見えている。ここからの奇襲は入念且つ大掛かりな準備が必要だろう。今の状況から見ても現実的では無い。

だからこそ、やる価値がある。

「私が壁を跳び越え背後に回り込みます。それならば敵の警戒も薄いでしよう」

「——2 m以上はあるんですよ!?登れたとしても撃たれて終わりです！危険過ぎます、自殺行為です！」

どうやら彼は誤解をしているらしい。言った内容が上手く伝わっていないのだろうか。

「誰も登るとは言っていない。私は、跳び越え...と言ったのです」  
改めて説明し返事を待たずに、大きく跳び上がった。

背後で驚きの声が聞こえたが知った事ではない。そのまま壁の上に足をかけ、再度全力で跳躍する。

眼下には今も味方へ向け攻撃を続ける敵達の姿が見える。案の定こちらを見上げている者はいない。狙うのは一番奥にいる敵の頭だ。速やかに、こちらに注意が向く前に可能な限り数を減らしたい。

上手く体勢を合わせながらナイフを二振り、目標の敵頭頂部へと突き立てた。

足元から耳を刺すかのような絶叫が上がる。結果から言えば失敗してしまつた。

頭部に突き立て即死させるつもりだったが、ナイフの刃は人体で最も硬く厚い骨である頭蓋骨を貫通せず、その丸みに沿って肉を、両耳を削ぎ落としながら鎖骨付近へ深々と刺さつたのだ。

赤く、生温い液体が飛び散つた。

「ひいひい!!?」

「コ、コイツどつから出てきやがった!!?」

叫び声を聞き周囲の敵が一齐にこちらへ振り向いた。

即死させていたなら敵の反応が遅れ、もう1人くらいは倒せたかもしれない。だがそれは叶わずに想定外の早さで発見されてしまつた。

急いでナイフを引き抜く。が、血で上手く握れずに右を抜き損ねてしまつた。

「死ぬ!クソ野郎!」

傍らにいた敵がこちらへと銃を構える。とつさに開いた右手で足の敵を引き起こした。両方の肺と、あわよくば心臓を損傷させた体だ。放つておいても死ぬ体を有効活用し盾にする。

そのまま撃つてくるかと身構えたが、イシユヴァール人の同胞意識はなかなか高いようだ。

「ひ、卑怯もゲ」

最後まで喋りきる前にナイフを投げつける。なんとか狙つた所、敵の喉へと刺さってくれた。筋力を強化して投げた為か首があらぬ方向に曲がり、吹き飛ばすようにして倒れた。当てる自信が無かつた訳ではないが、それでも当たってくれた事に安堵してしまう。

そしてそのまま間を置かず反対側へ盾を投げ飛ばす。ちようどこちらを狙っていた敵2人目掛けて薙ぎ倒すように叩きつけた。大柄な成人男性の体がほぼ水平に飛んできたのだ、避けられるはずもない。壁へ強かに打ちつけられた2人が立ち上がる気配は無かった。

順調だ。味方はまだ攻め込む機を掴めないのか入り口の外で牽制を続けているが、まだ敵を減らす必要があるのだろうか。どちらにせよこの場で手を止める理由は無い。

さらに敵を打ち倒さんと走りだしたその時だった。

「——ッ!!?」

私の右大腿部に強烈な衝撃、そして一瞬後に経験した事の無い激痛が襲いかかって来た。

声が出ない。痛い。熱い。まるで燃える棒を刺し込まれかき混ぜられたかのようでも言うべきか、想像を絶する激痛が伝わってくる。全身が強張り、走り出そうとした勢いそのまま転倒してしまった。

どうやら撃たれたらしい。だがそれしか判らない。どの方向から撃たれたのか、弾は貫通したのか、どれ程の傷なのか、それすらも判らない。

銃とはこれほどまでに痛いのか。砂利と瓦礫の上を転がりながら、私はより激しさを増す痛みに耐えるしかなかった。

命の危険、死の恐怖。今までどこか他人事のように捉えていたそれが、足音を立てながら私へと近づいてくる。治療のためにと練成陣スクロールを取り出そうとするが、手が震え他の練成陣ごと取り落としてしまった。

「よくもやりやがったなこの野郎!」

そしてそれは眼前へとやってきた。

銃が向けられる——死の間際には時の流れが遅くなる、という俗説を思い出した。

徐々に顔へと向けられる銃口——実にちっぽけな穴だ。こんな小さな穴を向けられただけでここまで恐怖するのか。

狙いが定まるまであと一秒も無いだろう——まだ死ねない、まだ死にたくない。何か武器は無いか。

ナイフは手を離れた。練成陣は取り落とした。何でもいい、何か、何か無いか。

追い詰められた私には、まるで子供のように瓦礫交じりの砂利を投げつける事しか出来なかった。

散弾銃ショットガンという武器がある。

文字通り無数の弾弾を撃ち出す大型の銃であり、狩猟や害獣駆除、そして対人とその用途は多岐に渡る。

まだ医院に勤めていた時にいた狩猟好きの同僚が自慢げに話していたのをよく覚えている。

曰く、通常の銃とは違い点ではなく面を意識した銃撃である。

曰く、鳥用と獣用など得物に合わせ撒き散らす弾の号数が変わる。

曰く、号数が小さいほど弾が大きく強力になる。

さて、私の足元には教会と思しき施設の屋根が崩れ落ち粉々になった、無数の砂利がある。たつた今それを一掴み、相手の顔面へ投げつけた。

姿勢こそ安定していないが、それでも成人男性を片手で投げられるほどに強化した腕力だ。その私が全力で、力任せに、瓦礫を顔へ投げつけたのだ。

何が起こるかは全く考えられなかった。死にたくない、ただそれだけだった。

次の瞬間、まるで水袋を破裂させたかのような音が響いた。

まだ撃たれていない体、そして響いた謎の音。

恥ずかしながら投げた時は恐怖から目を閉じてしまい、その決定的な場面は見る事が叶わなかった。

恐る恐る目を開けた視界に飛び込んできたのは――

額を削られ、

右目を潰され、

頬を抉り落とされ、

顔の右半分を赤黒く濡らした敵の姿だった。

筆舌に尽くし難い、まるで獣のような凄まじい絶叫が響く。顔を押しさえつけ痛みへのたうつイシユヴァールの屈強な兵。周りの敵兵もこのただ事ではない叫びで混乱したのか右往左往している。私が味方を回復させた時も負けず劣らずの断末魔だった。あの時は壁の向こう側、視界が遮られた場での出来事だ。

だが今回は彼らの同胞の声だ。さらに『何が起こったのか』が嫌でも視界に入る。彼らの心を挫くには十分すぎる。そして。

「今だ！少佐を守れ！」

「GO！GO！GO！」

その好機を逃すアメストリス兵ではない。

こうしてはいられない、味方に守られて何が国家錬金術師か。何が人間兵器か。まだ動かせる左脚を奮い立たせ、散らばっていた治療用練成陣を飛びつくように拾い、傷を直す。

これで動ける。まだ戦える。

武器はいくらでもあるのだから。

## 幕間 発見された手記より

— 月 — 日

ここに來てから初めての日記だ。忙しさに追われ息をつく暇も無いほどだったが、ようやくペンを握れる。だが書くべき事が多すぎてどの事を書いたらいいのかわからない。とにかく毎日が患者との戦いだ。大きな怪我、小さな怪我。そして治療を受けずに出て行く人たち。覚悟していたとはいえ、いざ目の前で拒絶されるとつらい物がある。

協力してくれる人が増えたのはありがたいが、まだまだ人も物も足りない。薬が足りなかつたせいで満足に助けられなかつた人もいる。罵倒されるのがつらくないわけじゃないが、助けられなかつたのもっとつらい。そんな状況がここに来てからは毎日だ。

患者は増え続け、物は減り続ける。エッジさんからの物資も頼れなくなってきたしまった。今は協力し理解してくれる人たちがいるのが唯一の救いだ。

戦場はどんどん酷くなる一方のようだ。運ばれてくる患者も初めは屈強な若い男性ばかりだったのが、次第に年齢層が広がって老人や少年と言つて差し支えない年代も運ばれてくるようになった。前線に近い所にいた人が言うには、国家錬金術師が動員されてからさらに激化したそう。まるで魔法みたいな、ウソのような手を使つてくるのだとか。

何も無い所が爆発したり火の海になる。顔の肉を剥ぎ取つていく敵がいる。家や壁から武器が生え襲ってくる。撃つても死なない兵がいる。山のような壁を作り出し地形を変える。

耳を疑いたくなるような話ばかりだ。どこまでが本当なのかはわからないが、患者が増えているのは事実だ。だが、撃つても死なないというのは少しだけ気になる。どういう原理かはわからないが、こっちは少ない薬をやりくりして必死に診療所の体裁を保つて、なんとか死者を出さないようにしているというのに。どうやった結果の『死な

ない』なのか、興味はあるがそれ以上に恐ろしい。

そういえば以前、中央セントラルの病院に錬金術で施術する腕のいい医者がいるという話を聞いた覚えがある。風の噂では国家錬金術師を目指し退職したらしいが、まさかそんなはずは無いだろう。仮にそうだとしても元医者がこんな戦場の最前線に出てくるものなのだろうか。

何にせよまだまだ患者は増え続けていくだろう。国軍がどこまでやるつもりかはわからないが、私達がいることで少しでもイシユヴァールの人々の支えになればと思う。叶うならこの内乱が最小の被害で終わってくれるのが一番だ。ウィンリイとの約束も守れるし言うこと無しだ。

明日からはもっと忙しくなるに違いない。薬や麻酔をなんとか調達しなければ。包帯や止血帯も新しいのを作らないといけない。

やる事が山積みだ。